
『snowdrop』

想隆 泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『snowdrop』

【コード】

N6295Z

【作者名】

想隆 泰気

【あらすじ】

全てを無くした少年は、その日、一欠片の雪が小さな花になるところを見た

(前書き)

・思いつきショートショートですがよろしければ。

しんしんと降り積もる雪が、小さな花になるのを見た。

幼い頃の話。心も体も幼くて、小さくて……取るに足らない弱いイノチだった頃。

冷たい雪の中に体を投げ出して、もう起き上がる気力も湧かなくて。

このまま、死んでしまってもいいや……なんて思ってた。

どうして？

そう言って、僕の顔を覗き込んだのは誰だったのか。もう、思い出すことは出来ない。どんな顔をしていたのか、どんなヒトだったのか。

ただ、優しそうな女のヒトだったことだけは覚えている。

どうしてって、決まってるでしょ、と凍り付く唇で辛うじて答えた。

僕は、独りきりになってしまったから。たった一人の家族だった母が、いなくなってしまったから。

雪の中を、二人で歩いていたはずだった。けれど、気がついたら母の姿はなくて、僕は独りきりで。こうして体力が尽きるまで探したけれど、結局は見つからなくて。

……置き去りにされた、と言うことが、幼い僕に分かっていたわけじゃない。捨てられた、と言うことを知っていたわけじゃない。まして、自分の子供を「要らない」と思う親の心理なんか分かるわけもない。

ただ、母がいない。その孤独に僕は耐えられなかった。社会から隔離されたような生活を送っていた僕にとって、母以外に頼るべきヒトなんてなかったから。

ヒトは独りじゃ生きていけない。最初にそう言ったのは誰なんだろう。使い古された言葉だけど、その通りなのだと思う。ヒトの温もりがなければ、体よりも先に心が死んでしまう。凍てつく風には耐えられない。

そう……可哀想に。

そう言って、そのヒトは寂しそうな顔をした。

けれど、すぐに優しく微笑むと、雪の中に沈む僕を抱き起こして、言った。

確かに、今は独りで、寂しいかも知れない。でも、ヒトはいつまでも独りではないわ。

言われている意味が分からなかった。だから、僕は独りだよ、そう言った。

そんなことないわ。だって、今はこうして私が傍にいるじゃない。それでも独りだって言うの？

幼心に、それは屁理屈だと思ったのかも知れない。或いは、どこか挑戦的なその物言いに、引つかかる物を感じたのか。お姉ちゃんなんか知らないもん、半ば拗ねたようにそう言った。

生意気な子供の言葉に、けれど、少しだけ元気を取り戻した僕の言葉が嬉しかったのか、そのヒトは笑った。

そうね、私も君を知らない。いいえ、さっきまでは知らなかった。でも、もう知らないわけじゃない。君だってそうよね？

なんて。また屁理屈だと思った。だから、分からないよ、そう言

って眼を逸らした。知らないよ、とは言えなかった。屁理屈の筈なのに。

頑なな僕の態度に音を上げたのか、そのヒトは少しだけ嘆息すると、

じゃあ、私が手品を見せてあげる。……だから、元気を出して？
生きていれば、この先何人ものヒトと出会う機会があるのだから。

そう言って 雪を、小さな花に変えた。

雪の降る日は、そんな昔のことを思い出す。今でも不思議で、全て夢だったのではないかと思ってしまうような淡い記憶。

……だけど、そんなことはどうだっていい。雪の欠片が花に変わるあの瞬間、僕はそこに、確かな希望を感じたのだから。

どうしたの？

ぼんやりと空を見上げていた僕に、そんな声。振り返れば、一人の女性が立っている。……恥ずかしながら、僕の大切なヒトだったりする。

あれから幾らかの時が過ぎて、僕にも幾らかの絆と呼べる物が出て、大切だと言える女性も出来た。あの日、あの奇跡に出会わなければ到達出来なかっただろう場所。

あの日、あのヒトに出会っていなければ、僕はどうなっていたんだろう。そんなことを思うと、どうしても表情に陰りを帯びてしまう。

何でもないよ、と、心配を掛けたくなくて僕はかぶりを振った。
けれど彼女は、

元気ないね？

そう言っつて、どこか挑戦的な笑みを浮かべた。彼女は時々、こんな風に試すような顔をする。僕はそんな彼女が嫌いではなかったけれど、少しだけ拗ねたように、そんなことないよ、と吐き捨ててみる。

彼女はにこりと満足げに笑うと、しんしんと降り積もる雪の中へと身を躍らせた。戯けるように、くるりと軽いステップなど踏んで見せる。

危ないよ、と声を掛ける僕に、

ねえ、元気が出るおまじない。手品を見せてあげる。

そう言っつて 手にした雪を一欠片、小さな花に変えて見せた。

その時の僕は、きっと途方もなく間抜けな顔をしていたろう。何が起こったのかも分からずに、眼を見開いて、口をあぐりと開けて、ただただ彼女の手の中を見ていた。

僕は慌てて彼女を問いただそうとしたけれど、彼女はそれを待たず、満足げににんまりと笑うと、傘を開いて僕の腕を取った。

元気が出たら、早く行こうね。立ち止まっていたら、風邪引いちやうよ？

そんな風に言う彼女に促されて、僕は歩き出す。

……結局、問いただすことは出来なかった。

けど、それで良かったのかも知れない。大切なのは、今、僕は確かにここにいて、大切なヒトがここにいる。……それだけだから。

胸中に浮かぶのは、一つの伝説。

冬の寒さに凍え、絶望する原初のヒトを慰めようと、降りしきる

雪を小さな花に変えて見せた心優しき天使の話。
そんな、小さな花の伝説

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6295z/>

『snowdrop』

2011年12月21日01時01分発行